

おおぎやなぎちか

中原じゅん子 絵



二〇二二年初冬。その日も学校は、これといった事件もなく一日が過ぎた。そして、六時間目。

「すっげえ！」

隣の席の高見蓮たかみ れんが、あたしのテスト用紙を凝視している。

「見ないでよ」

やる気ゼロで受けた数学のテストだ。四九点取れただけ、ましつてとこ。そりゃあ高見は、このままいけば、高校のほうから「うちへぜひ」と頼んでくるんじゃないかってくらい、頭がいい。すっげえの次に来るのは、「すっげえ、こんな低い点初めて見た！」とか？

あわてて、テストを折りたたんだ。ところがHRの後、帰ろうとしてたら、高見に引き止められた。

「待てよ」「なに？」

あたしは、中学入学後テニス部に入ったものの、夏休みにケガをして、そのままやめ、放課後、部活に急ぐ必要はない。でも、こいつと話す気にはならない。

「だからなに、用があるなら早くして」

きのうまであたしのことなんて、完全無視だったくせに。

「俳句だ」

「え？」

「名前、合田奈々子ごうた ななこっていうんだな」

高見とは二年生になって初めて同じクラスに、さらに先の週の席替えで隣になった。それから一週間は経ってるっていうのに、今、名前を知ったわけ？ たまたまテスト用紙に書いてある名前を見たってわけ？ っていうか、一学期から二学期にかけて、ずっと知らないままだったってこ